
ゴーストハント 呪詛の陰

キリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストハント 呪詛の陰

【Nコード】

N47840

【作者名】

キリ

【あらすじ】

駅の改札口から降り立つと、あたし（谷山麻衣、一七歳、本業学生）は真っ直ぐ八チ公前を通りすぎて道玄坂の方へと向かう。心なしその足取りは軽く、浮き立つ心を抑えきれないまま自然と小走りになっていた。

——ゴーストハントというより、原作悪霊シリーズの続編として創った二次創作です。初っ端からネタバレが多々あります（ゝ悪霊の棲む家まで）。原作悪霊シリーズの雰囲気を出すため、ちよっと死

語である言葉も使用しています。

以上を踏まえて、宜しければ覗いてみてください。

最後に、原作は今年11月から新しくなって絶版状態だったものがもう一度刊行されるそうです。リライト版に合わせて、タイトル変更しました。

ブローグ

駅の改札口から降り立つと、あたし（谷山麻衣、一七歳、本業学生）は真っ直ぐ八チ公前を通りすぎて道玄坂の方へと向かう。

心なしその足取りは軽く、浮き立つ心を抑えきれないまま自然と小走りになっていた。

——どうしてそんなに浮かれているかって？

それはもちろん、イギリスへと帰国していたナルたちが戻ってきたからに他ならない。

ナルというのはあたしの職場の上司で、すごくイヤミなやつではあるんだけど、会えないと寂しいと思えるくらいには好きなんだな。

もちろんナルだけでなく、その助手であるリンさんのこともね。

だからまた二人に会えると思うと嬉しいし、ちよつとでも早く会いたいと小走りにもなっちゃう。

ナルたちがイギリスから戻ってきて今日で一週間。

日本のオフィスへと帰ってきてからすぐに仕事の依頼を受けたため——というより、あたしが無理に依頼を受けさせちゃったため、事件解決後しばらくオフィスは臨時休業となっていた。

今度はさすがにホテル住まいというわけにもいかないから、ナルは都内にリンさんと二人、ちよつと広めのマンションを借りるみたい。その手続やら荷ほどきやらで、お休みしないといけなかったというわけだ。

正直、そんなことまったく考えていなかったあたしに、ナルが嫌味を言うのは当然のこと（それについては反省しきりデス、ハイ）、荷ほどきを手伝おうかというあたしの提案も、そりゃあ冷たく却下されるというものだ。

まあ、それだけならあたしや他の人間でオフィスを開けてもよかったわけだけど、休みの理由はそれだけでなく、前回の仕事の際にずいぶんと体力・気力を消耗したから、という理由もある。

そう、あたしたちのお仕事は、体力の他に気力も使う。なにせ「心霊現象の調査」という特殊なお仕事の関係上、泊り込みで事件にあたったり、ときとしてお被いなどにも必要になってくるからだ。

このお被いにも浄霊と除霊というものがあって、どちらもそうとうな気力を消耗する。

前にあたしも一度浄霊したことがあったけど、そのときは次の日の昼すぎまでぐっすり眠り込んでたもんね。

そういうわけで、わが『渋谷サイキック・リサーチ』は今日からお仕事を再開。

調査員の肩書きを持つあたしも、こうして数日ぶりにオフィスのある道玄坂をのぼっているのであつた。

そうして坂をのぼると、レンガ色のアンティークなビルが見えてくる。一階がちよつとした広場のようになった、オシャレなビルだ。中央には噴水があつて、あたしはその噴水のわきを通りすぎてエレベーターへと向かう。

そのエレベーターで二階へあがり、ハイ到着。

インテリア・デザインやら矯正歯科のテナントを通りすぎ、少し奥まったところに構えるオフィスへと直行。

外界とオフィスとをつなぐブルーグレーのドアには、上半分に模様入りのすりガラスが入っていて、そこに金の繊細な字体で「SPR」というロゴと「Shibuya Psychic Research」というオフィス名が書かれている。

ここが、本業である学生とは別に、あたしがお仕事をしているわが麗しの『渋谷サイキック・リサーチ』——そのオフィスであつた。

ドアノブを回すと、突然中から笑い声が聞こえてくる。

ナルが大声で笑うところなんて見たことがないし、リンさんにつ

いてもそう。

そもそもあの二人が大声で笑うことなんてあるのかなあ？

脇の下をくすぐっても、平然とした顔でイヤミを言われそう……。その他『渋谷サイキック・リサーチ』には、学校は違うけどいっこの上の先輩であるタカ（高橋優子、苦難の受験生）と安原さん（安原修、花の大学生）という同僚の面々がいるが、タカは受験生だからよほどのことがない限りオフィスには来ないし、安原さんも仕事をサボってまで漫画を読んだり遊んだりするような人ではない。

なにより、声はひとりではなかった。

「あれー？　ぼーさんたち、来てなんだ」

中を覗くと、そこには安原さんだけでなく、ぼーさん（滝川法生、ミュージシャン兼坊主）の他に、真砂子（原真砂子、タレント兼霊媒）や綾子（松崎綾子、医者娘で巫女）、さらにはジョン（ジョン・ブラウン、オーストラリア人の神父）まで各種方面の霊能者たちがそろい踏みであった。

「おっ、よーやく麻衣も来たか」

そう言っただけでぼーさんが軽いノリで手を挙げる。

「ずいぶんと早かったじゃない」

綾子が少しだけ横に詰めて、ソファーにあたしの座るスペースを作ってくれた。

「うん、まあ学校終わって、すぐに来たしね」

あたしはデスクにバッグを置き、コートを脱ぐ。そうして自分用のお茶（今日はアルグレイにしよう）を用意してから、綾子の空けてくれたスペースに腰をおろした。

……うーん、やっぱこんだけ人数がそろつと、さすがにせまいなあ。

「こんにちはですー」

テーブルをはさみ向かい合う形で、同じくソファーに座っていたジョンに笑顔向けられ、思わずあたしも笑顔になる。

「ジョンまで、みんな一体どうしたの？」

「どうしたもこうしたも、あたくしはナルに会いに來ただけですわ」
—— ああ、真砂子はそうだろうね。

こいつはナルにホの字なのだ。
夢でジーンとナルを勘違いしてたあたしと違って、最初からこいつはナル狙い。

解剖されるんじゃないかっておそれがあるのに、今でも一途に想い続けるあたり、やっぱ真砂子ってば乙女だよなあ。

「みなさん、所長が戻ってきたということで、歓迎会をするために集まってくれたらしいですよ」

奥の方に座った安原さんが、にこやかに事情を説明してくれる。

……ほほう。

なるほど、そういうわけか。

ナルたちが戻ってきてからこっち、すぐに仕事だったし、休みの間はオフィスも閉まって連絡を取れなかったから、仕事再開日の今日、全員がオフィスに集まったというわけだろう。

—— って、あれ？

「あたし何も聞いてないーい！」

なんだい、なんだいつ！

あたしだけノケモノかあ？

そう思っただけ抗議の声をあげると、安原さんが小さく手を挙げてそれにこたえる。

「大丈夫です。僕も聞いてませんでしたから」

いやいや、そういうことじゃなくてっ。

「麻衣と少年はこのスタッフだからな。黙っていてもここに来んだろ？」

そりゃそうだけさあ……。

先にひと事くらい声をかけてくれたっていいじゃんか。

……シクシク。

—— あっ、そういえば。

「主役のはずのナルはどうしたの？」

あたしのその言葉に、全員が顔を見合わせた。

一瞬、誰もが言葉に詰まる。

やがて、その疑問にこたえたのは、やはりというか安原さんだった。

「それがですね、すっかり天岩戸状態です……」

ナルに歓迎会のことを話してみたものの、あっさり断られて所長室にこもられてしまった、ということだろう。

リンさんもそうだけど、お祭り騒ぎの嫌いなヤツだからなあ。

人の好意をムダにしおつてっ。

「まあ、天岩戸と違って、賑やかにすればするほど相手は閉じこもっちゃいますかねえ」

日本神話の天岩戸は、岩戸の前でわざと賑やかにすることによって、それを気になった神様が岩戸を開けて覗いたところを、引っぱり出すお話だったはずだ。

ふうむ。

確かにウチの神様の場合、賑やかにするのは逆効果だろうなあ。

「で、だな。そこで、麻衣の出番というわけだ」

へっ？

「あ、あたしい？」

どどど、どうしてそこであたしなんだあ……？

あたしがクエスチョン・マークを浮かべていると、ぼーさんは続けて、

「少年に聞いたぜ。前回の事件のとき、お前さんがナル坊を言い負かして事件の依頼を引き受けさせたんだって？」

犯人である安原氏は、笑顔でこちらに手を振っている。

ぬうつ、よけいなことを……。

それはそれとして、思わぬところで白羽の矢が立ったものだ。どうにも断れる雰囲気ではない。

「——やってみるけど、あまり期待はしないでよね」

あたしはそう言つて立ち上がると、所長室のドアの前までやつて来る。

さあて、なんと声をかけたらよいものか……。

うーん。

そうやってあたしが悩んでいると、

「麻衣さん、あんじょう、おきばりやす」

ジョンの独特な関西なまりの応援に、思わず肩の力が抜けるあたしであつた。

——まつ、いいや。

悩んでいても仕方がない。なるようにしかならないだろう。

——全員が固唾を飲んで見守る中、とりあえず所長室のドアをノックしようとしたときだつた。

オフィスのドアが開いた。全員が申し合わせたかのようにそちらを振り返ると、そこにはスーツ姿の男の人が立っていた。

それも、ここにいる全員が知っている顔だ。

「うおつ、な、なにがあつたんだ一体……？」

男の人——前回依頼人といつしよにこの場所を訪れた、東京地検特捜部の広田正義さんは、目をまるくしてただただ啞然とその場を動けずにいた。

そりゃそうだよね。

ドアを開けたら、ここにいる全員に無言で見つめられるんだもん。広田さんでなくとも何事かと動揺するに決まってる。

……はあ。

にしても、広田さんって……。

「——お前さん、ホンツとに間の悪いヤツだなあ」

あきれたように言つたばーさんの声が、シンとしたオフィスにこだましたのであつた。

プロローグ（後書き）

十分推敲したので、珍しく書き直すことはないかと思われます。

「ソファア」とかわざとですからね？

今回のお話には、明確な敵を出すつもりです。

原作ぐらいの怖さが出せればいいなー（願望）

麻衣さんの頭をナデナデしてあげたい（＊。。）＝3ハアハア

10・31・ちょっと書き加えちゃったや。

てかマジで時間がないので続きが書けない。今少し書いてるけど。
産砂先生が出ます。

一章 奇妙な接点？

1

「——今日来たのは他でもない、お前たちに話を聞きたかったからだ」

まさかここでいつきに話を聞けるとは思わなかったが——そう言
って切り出した広田さんに、ナルは軽く溜め息を吐くと、少し険の
ある漆黒の視線をむけ、

「できれば手短にお願います」

ええ、これがナルです。

そーぜつに顔はいいけど、おまけに飛び級で大学に入っちゃうく
らい頭もいいけど、それに反比例するかのように性格が悪くて、尋
常でないくらい高いプライドの持ち主。

傍若無人、傲岸不遜、天上天下唯我独尊。

基本的にナルは誰に対してもこんな感じだし、一度知ってしまえ
ばそんなに気にもならないんだけど、広田さんは若干居心地が悪そ
うに身動きをした。

それというのも、前回の事件のとき広田さんは、よりもよって
ナルを双子の兄であるジーン（ユージン・デイヴィス、あたしの初
恋の人）の死体遺棄事件における重要参考人として内偵していたの
である。

そりゃあ、依頼を持ち込む際に「オリヴァー・デイヴィス」って
ナルの本名を知っていたのも当然というわけで。

ナルは絶対に自分から本名を名乗らないし、必要なときは「渋谷
一也」と名乗るようにしている。だから、ナルの本名を知らなかつ
たあたしは、ナルシストのナルちゃん、なんてあだ名を付けてしま
ったわけなのだ。

まさか、本名であるオリヴァーの方の愛称もナルだとは思わないしね。

——それはともかく。

もともと心霊現象に否定的だった広田さんも、その事件の際に数々の心霊現象と遭遇することによって、今ではそういった不思議な出来事に対して一定の理解を示しており、一応ナルへの疑いも晴れた形である。

とはいえ、ナルを殺人犯扱いしたことには変わらず、加えてかたくなに心霊現象を否定していた広田さんは、事件の際に重要な手がかりを黙秘するというあやまちを犯してしまった。

つまり、広田さんはナルに負い目を感じているのである。

しかし、それでも広田さんは毅然とした態度で、言葉を続けた。

「産砂恵、という女性を知っているな？」

……産砂。

一瞬脳裏に浮かんだのは、ひとりの女性の無垢な笑顔。

それが以前依頼のあった学校——タカの通う湯浅高校で出会った、生物の先生であることをあたしは思い出していた。

それと同時に、その湯浅高校で起こった事件のあらましも……。

「以前、依頼を受けた学校に務めていた教師の方、としか。——彼女が何か？」

……そう。

対外的には、そういうことになっている。

湯浅高校で起こった問題は、自然的に大量発生した幽霊による仕業だと。

しかし、あたしたちは知っている。

あの事件は人為的に引き起こされたものであり、産砂先生こそがその犯人なのだ。

幼い頃に自身の超能力をマスコミに否定された経験を持つ先生は、同じように超能力を否定された笠井千秋さんにかつての自分の姿を重ね、否定した人々を次から次に『厭魅』という『呪詛』を使って

襲ったのだ。

最終的には厭魅をおこなっている人形を全て焼き捨て、術者である先生にカウンセリングを行わせることによって事件は解決をみたはずであった。

まさか、もう一度産砂先生の名前を聞くことになるとは。

もしかして、また同じような事件を起こしたのではないか？

そう、ぼーさんたちと顔を見合わせたときだった。

「彼女は亡くなった」

——へっ？

思わずあたしは広田さんの方を振り返る。

産砂先生が、亡くなった……？

あたしは、その言葉をすんなりとは受け入れることができなかった。

「どうして……？」

呆然と呟いたあたしに、広田さんはどこか言いよどむような齒切れの悪い言葉で、

「自殺だ。君たちが受けた事件のあと、彼女は故郷である福島の方に戻っている。最近になって、彼女はそこで知り合いのつてを頼りに再び教鞭についていたんだが、今から一週間前にその学校の屋上から身を投げ、死んでいる」

一週間前というと、ちょうどナルたちが日本に戻ってきたときだ。でもそんな、なんで……。

「ただし、自殺にしてはいくつか不審な点があつてだな」

不審な点？

広田さんは真剣な面持ちで頷くと、

「まず、彼女の身边を調査したものの、彼女には自殺する動機となるものが見つからなかった。そして、彼女にはここ最近、なにやらおかしい言動が目立っていたそうだ。——なんでも、幽霊に殺される、とか」

幽霊に殺される……。

それを他の誰かが言ったのだとしたら、こんなにも確信はもてなかっただろう。

だけど、それを口にしたのが彼女だからわかる。

産砂先生は、誰かに『呪詛』をかけられたんだ……。

「実際、その学校では幽霊の目撃証言が多発していてな。そこで、東京地検『ゼロ班』である俺に話が回ってきたというわけだ」

広田さんの所属するゼロ班という部署は、主に心霊現象や超能力、呪詛に関係する事件を担当する部署だそうで、本来は名前のない部署なんだそうだけど、誰かがおもしろがって霊と零をひっかけて名付けたのだとか。

今回の事件も、そうした中のひとつだったのだろう。

それで、過去に彼女が勤めていた湯浅高校の事件と関わりになったあたしたちに、まず話を聞きに来たというわけだ。

「……そうですか。事情は大体わかりました。しかし、彼女の死に関する手がかりになりそうなことは、こちらではわかりかねますね。」

——それではお仕事の方、頑張ってください」

——なぬっ！

ええい、それでいいのかホントにつっ！

……まあでも、仕事の依頼があつたわけでもないし、確かに『呪詛』であるという証拠がない以上、いい加減なことが言えないのもわかるけど。

うー。

ナルが席を立とうと腰を浮かし、思わずあたしが口をはさもうとしたときだった。

「待ってくれっ！ 頼む——」

広田さんはテーブルに手をつき、頭を下げる。

「俺に、お前たちの力を貸して欲しい。前回の事件でのことを考えれば、都合のいい話だと思うだろう。当然だ。……だが、これも本当に幽霊とやらに関わりのある事件だとするならば、俺には対処するすべがない。他にこの手の件に関して、信頼の置ける人間も

知らない。だから、頼まれてくれないか？　もちろん、謝礼はこちらで十分な金額を用意する」

ナルは席を立ったまま、見下ろすように広田さんを見つめる。

「……広田さんは、霊を信じていなかったのでは？」

どこかもの憂い色のナルの口調。

対する広田さんは頭をあげ、まっすぐナルを見つめかえした。

「……正直、前回の事件のあともずっと考えていた。あれは一体なんだったのか。本当に霊と呼ばれるものだったのか。俺にはまだ信じられない。だが、一方であれが現実であったこともわかる。——答えは、『わからない』だ」

それから広田さんは少しだけあたしに目配せして、
「それでも、人がひとり死んでいるのは事実なんだ。だから、何かが起こっているのであれば、あらゆる方面から徹底的に調べるのは悪いことではないと思う」

そこまで言って、広田さんはもう一度頭を下げる。

「だから頼む。力を貸してくれ」

ナルは肩をすくめ、溜め息を吐くのだった。

一章 奇妙な接点？（後書き）

そんなに遅筆な方ではないと思うんですが、どうにも時間がなくて先にすすみません。

最近、仕事して夕飯食べたら寝てるもんなあ。勘弁して欲しい。少しでも面白いと思ってもらえれば幸いです。

一章 奇妙な接点？

2

あたしたちが福島にある件の学校、尚陽高校へと向かったのは、その二日後のことだった。

オフィスから休憩をはさみつつ車で約四時間、都会の喧噪からはなれた緑豊かな場所に、その学校はあった。

今回、車の運転はリンさん（林興徐、ナルの助手であり巫蠱道の道士）と広田さんが担当することに。リンさんの運転するウチのオフィスのワゴン車には、ナルと真砂子（本当は調査員であるあたし）が乗る予定だったんだけど、心やさしいあたしは譲ってあげたのサ）が乗ることに。広田さんが借りてきたもう一台のワゴン車には、あたしとぼーさん、綾子とジョンが乗り込むことになった。

安原さんには、何かあったときのためにオフィスへと残ってもらっている。

結局いつものメンバーで行くことになったのは、昨日の話の時点でオフィスに全員がそろっていたから、というのもあるが、産砂先生が亡くなったのが『呪詛』によるものである可能性が高いと、ナルが判断したからだった。

相手が霊であるならば、まだいくらでも対処のしようはあるのだが、相手が人であるとなると話は別だ。

ときとして人は、悪霊よりも恐ろしい存在となる。

だからこそ、万全の体制で望むべきだとナルが主張したのだ。

……確かに、その通りなんだよなあ。

本当にこわいのは、生きているか死んでいるかではなく、マイナスの『気持ち』なんだとあたしは知っている。それが霊ならば悪霊となるし、人であるならば生きたまま闇に沈んでしまうことになる。

……あたしはかつて、そういった人たちを見てきた。大切な人を亡くし、哀しみに沈んでしまった人。生きること執着し、人としての道を踏み外してしまった人。人を恨み、憎しみにとらわれてしまった人。——そうして、彼らは人に害を及ぼす存在となってしまうのだ。

『呪詛』とはそういったマイナスの塊であり、人に害を及ぼすだけでなく、呪った人間の心をも蝕んでしまう。

——だから。

やっぱり、このままにしておくわけにはいかないよねっ！

到着して、まずは校長室に向かうのだけど、全員でそろそろ行くわけにもいかないから、とりあえず広田さんとナル、それからぼーさんとあたしで向かうことになった。

その間にリンさんは調査機材をおろし、ジョンと綾子が周囲の聞き込み、真砂子は異常がないか校舎を見てまわるといった算段である。

校長室ではまず、広田さんが前に出てあいさつをした。

「はじめまして、東京地検特捜部の広田と申します」

「校長の遠藤です。産砂先生の件……ですよね」

対する遠藤校長は、とても温厚そうな初老の女性だった。

広田さんは校長の言葉にうなずくと、続いてナルの紹介をする。

「はい。それで、こちらが協力者の『渋谷サイキック・リサーチ』所長——」

「渋谷一也です」

ナルは前に出ると、軽く会釈する。そうして、あたしたちのことも紹介し、他にもすでに調査にのり出しているメンバーがいることを伝えた。

「お話は伺っております。どうぞ宜しくお願いします。ですが……」
校長先生はすごく言いにくそうにする。広田さんの方を伏し目がちに見ながら、

「その、遠くまできていただいて申し訳ないのですが、調査にはあまり意味がないかもしれません」

「意味がないとは？」

言って、ナルの目が鋭くなる。

「私どもとしましても、職員が幽霊に殺されたなどと妙なウワサが立つのは困りものなので、今回の調査については大変ありがたいお話なのですが。実は産砂先生が亡くなられてから、幽霊の目撃情報については、とんと聞かなくなりましてね」

産砂先生の「幽霊に殺される」という発言が、生徒たちの間に幻でもみせたのではないか。

少なくとも、遠藤校長はそう考えているようだった。

「それについてはご心配なく。そういうことも含めての調査ですから」

そう。それについては、ある程度予測がついていたことだった。

この件が『呪詛』によるものであるとするならば、産砂先生が亡くなった時点で相手の目的は達成されているのである。

調査することはすでにむずかしく、意味がない可能性が高い。

ナルが最初、この件に関わろうとしなかったのには、そういう理由もあったのだ。

まあ、それでも引き受けた以上、しっかり仕事をやるのがナルのスタンスだけどね。

それに、これは考えたくはないけれど、『次』があるかもしれないから……。

「そう、ですね。……あ、こちらは三年生を教えます学年主任の佐藤さん。みなさんのことは彼に一任していますので、何かご用があれば言いつけてください」

校長先生に紹介され、室内にいた中年の先生が頭を下げた。

一章 奇妙な接点？（後書き）

次からはもうちょい軽いノリになるかと。
ではまた次回ノシ

一章 奇妙な接点？

3

校長室を退出すると、いつものように建物の位置を確認するため、佐藤先生にざっと学内を案内してもらう。

「——ずいぶんとお若いんですね」

佐藤先生は、チラリとナルの顔を伺うと、小声であたしにだけ聞こえるように言った。

「よく言われます。でも安心してください、ウチって腕だけは確かですから」

あたしは、ちからこぶをつくってアピールする。

……とはいえ、普通は心配になるよね。

所長はアレだし、他のメンバーもはつきりいつて一般の人が想像するような霊能者からはほど遠い。信用しろという方が難しい気がするもん。

ところが、

「そうですね。特捜部の方がご紹介されるくらいですから」

佐藤先生が微笑う。

おおっ！

そっか、今回は広田さんの紹介だしね。

さすが、信頼の東京地検特捜部。どんなにうさんくさくい相手でも、評価を一転させちゃうんだなあ（オイオイ）。

ナイス、広田さんっ！

あたしが振り返ると、広田さんは眼をパチクリとさせる。そうするうちに、廊下の向こうに真砂子の姿を見つけた。

「あっ、真砂子だ。おい、真砂子ーお！」

すると向こうもこちらに気づき、まっすぐあたしの前までやって

くる。

無言の視線。

「……真砂子？」

「あんまり大きな声で呼ばないでくださいまし。こっちが恥ずかしいですわ」

ああ、はいはい。

そいつはどうもすみませんねっ！

むっとするあたしをよそに、真砂子はそのままナルの元へ向かうと、

「やっぱり、霊はいないと思いますわ」

「そうですか……」

ナルは真砂子からの報告に頷くと、考え込むようすをした。

さて。これで、いよいよ霊ではなく呪詛による線が怪しくなってきたというわけだ。

でも、そうなるら一体どう調査したもんだか……。

産砂先生のとき同様に、呪詛が人形を用いた『厭魅』であるならば、使用した人形はすでに処分しているはずだし、運よくそれを証拠に犯人を見つけたとしても、あたしたちにその人をどうにかする力はない。

何とかしなきゃと思う反面、あたしたちにできることなんてあるのだろうかとも思う。

……ふーむ。

そんなことを考えていると、先に行く佐藤先生の足が止まった。

「——ここです」

佐藤先生が示したのは、今回ベースとして用意してもらった教室で、ドアの上には「視聴覚室」の札が下がっていた。

おや？

てつきり、普通の会議室に案内されるものだとばかり思っていたんだけど。

すると、佐藤先生が、

「会議室よりも、こちらのほうが電源など引きやすいかと思いましたが」

たしかに、それは助かるかも。

なにせ、サーモ・グラフィーやら暗視カメラやら、他にも未だ使い道のわからないものを含めて、調査にはたくさん電子機器を使うことになる。普通の会議室で困るということはないけど、こういった配慮は正直嬉しい。心霊調査なんていうと、うさんくさいのなんだのとイヤミを言うところもあるしね、うん。

そうして、佐藤先生がドアを開けようとしたときだった。視聴覚室の中から、男の人の叫び声が聞こえてきたのは。

「どうしたっ！」

広田さんが前に出て、最初に室内へと踏み入る。次に佐藤先生とぼーさんが。そのあと、恐る恐るあたしが続くと、そこにはアツケにとられたようにこちらを振り返る男の人が立っていた。

……って、誰？

「――御厨先生、一体何をなさっているんですか？」

佐藤先生が溜め息を吐く。

御厨先生と呼ばれた男の人は、取り出したビデオテープを見えるように手にし、

「はっ、いやあの、授業で使うビデオを編集していたんですが、上から別の映像を重ね録りしちゃいまして……」

え？

「……まさか」

広田さんがつぶやく。

さっきの悲鳴って、そういうことーあ？

うつわーあ、なんつー人騒がせな。

ぼーさんも、

「全く人騒がせなやつちゃんー」

佐藤先生は、こっちが申し訳なくなるくらい恐縮して「すみません」と小さく頭を下げると、あきれ顔で御厨先生の方へと向き直る。

「今朝の職員会議で言ったでしょう。視聴覚室は本日より一時的に使用できなくなります、って」

対する御厨先生は、ポカンと口を開き、

「……ああっ！　そうでしたね、そうでしたっ！　すみません、すみません」

今思い出したとばかりに、何度も頭を下げる。

大丈夫かなあ、この人？

こんなこといっちゃあれなんだけど、なーんか抜けてるって感じがする。

でも、どこか親近感のわくタイプだなあ。

「あつ、ではそちらの方が……」

「——もうよろしいですか？」

御厨先生の声をさえぎって、ナルが真砂子といっしょに視聴覚室へと入ってくる。

そういえば、この二人がいたっけか。

「そちらの方は？」

「ああ、歴史を教えています御厨圭吾先生です。御厨先生、こちらは今朝お話した……」

佐藤先生が言って、ナルを紹介しようとしたときだった。何か固いものが床の上に落ちる音がする。

見れば、御厨先生が手にしたビデオテープを取り落として、あたふたとしていた。

まーたこの人は。

「……失礼いたしました。『ゴースト・ハンター』の方、ですよね？」

あらためて、御厨先生はナルに握手を求める。

「『渋谷サイキック・リサーチ』所長の渋谷です」

——あれ？

何だろ。何だか違和感を感じる。

まあ、そんなに気にすることでもないと思うんだけど……。

「僕、大学では民俗学を専攻してしまして、幽霊にも興味があったんですよ。ぜひ何かお手伝いできることがあれば、言ってくださいね」

御厨先生が微笑う。

「ありがとうございます。それではさっそくですが、佐藤先生と御厨先生に、産砂先生の件について、いくつかお尋ねしたいことがあるのですが」

一章 奇妙な接点？（後書き）

その3です。

今さらだけど、麻衣の一人称はむずかしいなあ。
楽しんでいただければ幸いです。

一章 奇妙な接点？

4

ナルと広田さんが二人に話を聞いている間、あたしとぼーさんはワゴン車へと戻って機材を運び込む。ちなみに、真砂子はさっき視聴覚室に入る前にナルから安原さんに連絡を頼まれたらしく、途中でわかれることになった。

「ねえ、ぼーさん、やっぱり呪詛によるものだと思う？」

「今回の件か？ とりあえず真砂子が言うにや、ここに悪霊はいないみたいだしなあ。——ただ、自殺する人間ってのは、精神的に参ってる人間ばかりだからなあ。いくら霊に殺されると言っていたとしても、呪詛によるものだと断定はできないだろ」

まあ、ね。

あたしはこれまで死にたいと思ったことは一度もなかった。

おかーさんが中学んときに死んじゃったのはとても悲しかったし、天涯孤独のみなしことになったことはとても辛かったけれど、それでも死んでしまいたいなんて考えたことはなかった。

こんな性格だし、なにより周りの人たちがやさしかったから。

中学生のときは面倒見のいい先生がお家に下宿させてくれたし、高校生になってからは同じアパートに住む人たちや大家のおばーちゃんからよくしてもらっている。

祐梨や恵子、ミチルといった友人に、SPRの仲間たちもいる。

みんながいるから、あたしは今幸せなんだ。

自殺したいと考える人にも、そういった人たちがいれば——マイナスの『気持ち』をためこんで、暗い底に沈んでいる人に、プラスの『気持ち』を吹きこんであげられる人がいれば、きっと自ら死を選ぶなんて悲しい選択をすることはないのだろうと思う。

産砂先生はどうだったんだろう？

湯浅高校での事件の際、先生はどうしようもないくらいに闇に沈んでいた。狂っていたといってもいい。

あのときのあたしたちにはどうすることもできなくて、カウンセラーに任せることぐらいしかできなかった。

もしもあのときのままだったとしたら……。

「お前さんがそんな顔をする必要はないさ」

ぐしゃぐしゃ頭をかき混ぜられる。

あたしは顔を上げて、

「……やだなあ。あたし、そんなにわかりやすい顔してた？」

「そりやもう。大方、前の事件のとき彼女を救ってやれてれば——
なんて考えてたんだろ？」

ありやりや。

こりや筒抜けだ。はずかしーことこの上ない。

そういえば、前にナルにも同じことを言われたっけ。

あたしってば、ホントに成長しないなあ。

「彼女が本当に自殺するほど心を病んでいたんだとしても、麻衣が落ち込むことはないさ。誰でも彼でも救えるほど、俺たちやできた人間じゃねーんだからな」

……うん。

ぼーさんの言葉は正しい。けれどあたしは、「それでも」思っ
てしまう。

あたしは、自分と関わった人たちに幸せになって欲しいんだ。

そんなふうに考えていると、

「……嬢ちゃん、今度ウチに来るか？」

んん??

言葉の意味がわからなくてキョトンとするあたしを、ぼーさんが
つついた。

「だから、今度俺ん家に来るかって聞いてんの」

ぼーさんの、家に、行く？

——ええええっ!?

「どっ、どうしたの急に……?」

「いやなに、前から考えてはいたんだけどな。若い女子高生が俺なんかの部屋に来て、何か問題になるようなことになるといかんと思つて誘わなかったんだが、まあ、遅くならない程度なら大丈夫かと思つてさ」

ぼーさんの家が……。

実はすごく興味があつたりするっ!

「梅吉——俺ん家で飼つてる猫な——も、きっと気に入る思つんだが……」

うん。やっぱり、あたしつてばものすごく果報者だ。

落ち込んだり沈んだりすると、こうして手を差し伸べてくれる人がいる。

「ありがとう、ぼーさん」

ぼーさんは照れくさそうにそっぽを向くと、

「んっ。元気でしたか?」

「でた」

あたしはにっこり笑う。

「そりゃよござんした。——それじゃあ、さつさと調査機材を運びこむか」

はい。

くすくす。

どーしようもなく笑みのこぼれてしまふあたしに、ぼーさんがもう一度ぐしゃぐしゃと頭を撫でてくれた。

そうやって、ワゴン車のリンさんから機材を受け取り、ベースへと戻る道すがら、

「……あのっ、産砂先生のことを調べに来たんですか?」

あたしたちは声のした方へと振り返る。そこにいたのは、三人の女の子たちだった。

「そう……だけど?」

それを聞いて、彼女たちは緊張したように顔を合わせる。そして、意を決したようにその中のひとりが、はっきりとした声で言った。

「産砂先生は、わたしたちのせいで殺されたんですっ！」

あたしたちは、思わずお互いの顔を見合わせるのだった。

一章 奇妙な接点？（後書き）

半分寝ながら書いたんで、間違いがあつたら教えてください。
そんなわけで、その4です。

よく考えたら滝川さんとタメじゃねーか俺・・・。

一章 奇妙な接点？

5

あたしとぼーさんが女の子たちを連れてベースへと戻ると、すでに二人の先生は退室しており、室内にはナルだけが残っていた。

「あれ、広田さんは？」

「先生方と一緒に、幽霊を目撃したという生徒たちを集めてもらいに行ってる」

ナルはそつげなく答えると、机の上に広げた資料に目を落としたまま、こちらを見ようとしめない。

「そつか。えーと、それで所長」

あたしがナルのことを「所長」と呼ぶのは、あたしたち以外に他に人がいるときだ。ナルは仕方なくといった様子で、少し陰のある漆黒の視線をあたしへと向けた。

「お話をしたいという方たちがいらっしゃるんですが」

ナルは広げた資料をファイルに閉じると、首をふって中へと入るようにうながす。

「所長」に許可をもらい、あたしはぼーさんと一緒に機材を中へと運びながら、先ほどの女の子たちを招き入れた。

「ぼーさんは引き続き機材の方を頼む。麻衣はメモの用意を」

「へーい」

「三人とも、こっちへどうぞ」

女の子三人にイスへと座るように言って、あたしはナルの隣りに腰をおろした。

「代表者は……？」

ナルがレコーダーを机の上に置いてそう訊ねると、真ん中に座る女の子が、はい、と返事をする。

「お名前をどうぞ」

「藤井美和です」

先ほどあたしとぼーさんに話しかけてきたのも、この藤井さんだった。

「それで、お話とは？」

「産砂先生は……恵先生は、わたしたちのせいで殺されたんです」
藤井さんは、先ほど口にしたその言葉をもう一度告げた。

「さっきも言ってたけど、それって一体……」

思わず口をはさんだあたしを、ナルが片手で制する。

「ゆっくりでいいので、順を追って話してもらえますか？」

彼女はうなずくと、ことの発端を語り始めた。

「実はわたしたち、恵先生が赴任してくる前に幽霊を見たことがあった……」

「場所は？」

「校舎の裏手にある温室です。……その日は教室でついつい話し込んでしまい、帰るのが遅くなってしまつて。それで、三人で帰る途中で温室へフウツと消えて行く白い影を見たのが、一番最初でした」
「最初というと？」

「そのあと、連日のように変なことが起こるようになったんです」

「……なるほど。それをもう少し詳しく」

「放課後、帰宅していると誰かにあとをつけられているような感じがしたんです。でも、振り返ってみても誰もいなくて。最初は気のせいかなって思ってたんですけど……」

藤井さんはこわばった顔で話を続ける。

「今度は足音が聞こえるようになって……。それも、だんだん近づいてくるのがわかるんです。なるべく人通りの多い道を選んで帰るようにしたんですけど、どこにいてもその足音だけはハッキリと聞こえてきて」

ホントに怖かったのだらう。思い出しながら語る藤井さんの声は震えていた。

「ある日、とうとう足音が真後ろで聞こえるようになって、気味が悪くて走って自宅へと帰ったんです。急いで玄関のドアを閉めて、誰かがついてきていないかドアスコープを覗いたんですが……」

彼女はそこで、一旦言葉を切る。

「誰かが、向こう側からこちらを覗いていたんです」

なるほど、とナルはつぶやいて、他の二人にも話を訊く。

すると、藤井さん以外の二人にも同じようなことが続いたらしいということがわかった。

「それらは、いつ頃から？」

「えっと、先月の中頃からです。その頃はわたしたち以外に幽霊を見たなんて話はまったくなくて……」

「まったく？」

「はい。だから、誰もわたしたちの話を信じてくれる人はいませんでした。まわりからはウソつき呼ばわりされるし、幽霊は見るしで、だんだん学校に行くのも嫌になって」

以前、これに似た話をあたしは聞いたことがあった。

超能力なんてないんだと決めつけられて、孤独におちいってしまった少女の話。

そのとき彼女をかばった人間こそ、産砂先生、その人だった。

「でもそんなとき、恵先生が赴任してこられたんです。先生だけはわたしたちの話を真剣に聞いてくれて。……それで、誰かひとりでも信じてくれる人がいれば、救われるんだってわかったの」

もしかして、とあたしは心の中で思う。

ここでもまた、産砂先生はあやまちを犯したのでは、と。

しかし、次に彼女の口について出た言葉は、思いもかけないものだった。

「それから、たとえ信じてもらえないとしても、誰も恨んだりしてはダメだって言われて……」

「ちよっと待つてっ！」

あたしは思わずナルの制止を無視して口をはさむ。

「産砂先生が……そう、言ったの？」

「え？ ええ……」

藤井さんはうなずく。

そっか。

そうなんだ。

「それで、産砂先生が君たちのせいで殺されたというのは？」

ナルが指先で机を叩く。

「はい。恵先生に話をしてから、先生はその原因を調べようとしてくれたみたいで……。それからなんです。わたしたち以外にも幽霊を見たという話をあちこちで聞くようになったのは」

右にいた子が、顔を曇らせる。

「わたしたちが幽霊を見たなんて言わなければ……」

自分たちのせいでは、霊から怒りを買ったのでは、と藤井さんたちは思ったわけだ。

それで、産砂先生は殺されたのだ、と。

「変なことというのは、今もまだ？」

「いえ、先生がお亡くなりになる少し前くらいから、ピタリと止ま
つて」

「そうですか……」

ナルはうなずく。

「……それで、あの、先生が生前に言ってたんです。もしかしたら、幽霊に殺されるかもしれないって。それで、もしそのことを調べに来る人がいたら、これを渡して……」

そう言っ
て藤井さんが取り出したのは、板を削って作られた一枚の人形だった。

一章 奇妙な接点？（後書き）

お待ちしていた方はすみません。

約一年ぶりの更新です。

次はもう少しはやく上げたいな〜とか
— ♪ — チラッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784o/>

ゴーストハント 呪詛の陰

2011年11月17日03時14分発行